

古典Ⅱにおける「源氏物語」の教材化

——「明石の上物語」と「浮舟物語」をとりあげて(2)——

世 羅 博 昭

一

古典Ⅱにおける「源氏物語」の教材化にはさまざまな型がある^(注1)が、このたびは、「作中の主要な人物を選んで、その人物像を鮮明にとらえさせる」という立場に立って、「明石の上物語」と「浮舟物語」の教材化を試みた。

この教材化の試みとその考察については、すでに『月刊国語教育研究』(日本国語教育学会)第八十一集に一部を発表しているが、このたびは生徒の読後感想文をとりあげて、生徒の享受の実態からみた、私の教材化の試みの是非を再検討したい。

二

『月刊国語教育研究』第八十一集の拙稿と重複する点もあるが、「明石の上物語」と「浮舟物語」をとりあげた場合の教材化の試みと指導の概略を紹介しておきたい。

「主要な人物」として、「明石の上」と「浮舟」をとりあげたのは、次の四つの理由による。

①二人とも、いわゆる主人公と言われるほどの人物ではないが、明石の上は第一部・第二部で、浮舟は第三部で、それぞれ重要な役

割を担っている人物である。したがって、この二人をとりあげても、指導の工夫によって生徒に源氏物語のだいたい筋をとらえさせることができる。

②二人とも、実にリアルに形象化されているし、人間としての成長のあとも見えるので、人物像を追求するのに適している。

③学習者に、作者紫式部と同じ受領層に属する二人の女性が、その身分ゆえに、それぞれどのように生きていかねばならなかったかを追求させたかったし、また、この二人の人物の生き方を学習させることによって、人間というものについて考えさせたかった。

④さらには、この二人の人物を学習させることによって、同じ受領層に属していた作者紫式部の内面世界をも探らせたかった。

このうち、③と④が教材化のねらいであると同時に、指導の目標でもある。

なぜこのような、ねらいを設定したか。

紫式部の家系は、もとは藤原冬嗣の流れをつぐ名流であったが、父為時の代には政権とは全く無縁の受領層(中流貴族)に属するようになつていた。その娘が、今を時めく道長の娘彰子中宮の女房となった。この世の最高の栄華の世界に身を置き、宮廷や権勢家の動きを見聞きするなかで、彰子中宮一家の繁栄を賛嘆しつつも、一方

では受領層に育った紫式部は栄華の世界に安住できず、底深い憂愁に一人苦しんでいたようである。そういう紫式部が「源氏物語」のなかで、自分と同じ受領層に属する女性をどのように描いているか、それらの女性に作者のどのような願いや思いが託されているかも探ってみたかったのである。高校生にとってはやや高度なねらいであるが、登場人物の生き方を追求する読み方だけでなく、作者を意識した読み方をも高校生にさせたいと考えたのである。

教材化の実際と指導の概略は、次の表の通りである。

教材化の実際		資料		指導のしかた		時間	
導入…… ①紫式部と源氏物語 ②学習のテーマと授業構想		プリント		一斉授業（解説）		3	
第一章 光源氏の誕生（桐壺）		大系		一斉授業（精読）		5	
（導入） 明石の上一家の紹介 （系図・入道父子の結婚観）		プリント		一斉授業（解説）		2	
第二章 光源氏との結婚（明石）		大系		一斉授業（精読）		6	
第三章 光源氏との別離（明石）		大系		一斉授業（朗読中 心・通読）		2	
第四章 明石の上（上京・松風）		大系		一斉授業（精読） 究・発表		9	
第五章 明石の姫君、紫の上の養女に（薄雲）		大系		一斉授業（精読）		7	
第六章 明石の姫君入内（藤裏葉）		大系		一斉授業（朗読中 心・通読）		3	
第七章 明石の入道入山（若菜上）		大系		一斉授業（朗読中 心・通読）		2	
（導入）浮舟という人物の紹介 （系図・浮舟の半生の紹介）		プリント		一斉授業（解説）		1	
第一章 浮舟の生いたち（宿木）		プリント		一斉授業（解説）		2	

物語		浮舟		第二部			
第二章 左近の少将の婚約破棄 （東屋）		大系		一斉授業（精読）		6	
第三章 薫、浮舟を宇治に（東屋）		大系		グループ学習		9	
第四章 匂宮、浮舟と橘の小島に （浮舟）		大系		一斉授業（精読）		5	
第五章 浮舟、入水を決意（浮舟）		大系		一斉授業（朗読中 心・通読）		2	
第六章 浮舟の出家 （手習）		大系		一斉授業・個別学習		1	

まとめ……（感想文・レポートを書く）

（注）本文編としては、日本古典文学大系を複写したものと、手づくりの「原文に傍注を施した朗読のための資料」を準備した。（プリント32枚）ほかに、参考資料（プリント11枚）や各章ごとに「学習の手引き」（プリント21枚）を作成した。詳しくは前掲の『月刊国語教育研究』第八十一集を御覧いただきたい。なお、この実践は、昭和五十三年四月～十一月、広島県立安古市高等学校三年文系クラス（三単位）を対象に行なったものである。

三

この六十五時間に及ぶ学習指導において、三回、読後感想文やレポートの提出を求めた。

生徒の享受の実態を紹介しながら、はじめに考えていた「教材化のねらい」「指導の目標」が達成できたかどうかを明らかにしていきたい。

(1) 明石の上と浮舟の「人物像」の把握について

生徒が明石の上、浮舟という人物をそれぞれのよう人物としてとらえているかを紹介することを通して、私の教材化の試みの是非を検討したい。

まず、明石の上について書いた感想文を紹介する。

△感想ⅠV（前略）明石の上の登場は若紫の巻の中で、源氏の家来達の交わす噂話に始まる。当時の貴族社会からすれば、地位の低い受領階級に生まれ、一受領の娘にすぎない女性が孫にあたる宮たち、中宮と静かで平和な一生をおくるという匂宮の巻で終わる。

この間に、波瀾万丈の一生が展開される。

彼女の父明石の入道は、ある大臣の子として生まれ、彼の代に近衛中将の座を自ら辞して、播磨の国司となる。後に豪族と化した。住吉明神を信じ、娘を上流貴族にと常に志していた。豪族に化したとはいえ、もとは家柄もよく琵琶を奏するほど風流を解した。それとともに、蓄財や打算、かけひきにも秀でており、たえず地方民に落ちぶれたことを残念がり、中央政界への復帰を念願していた。

このような人を父としたために彼女の性格が作りあげられたとも考えられる。源氏と結婚した後は、女性としての苦悩を少なからず体験するが、常に聡明な判断と強い自制心によって、運命を凝視し、あらゆる苦痛に耐えた。懷妊中の身で源氏を見送ったことも、住吉に詣り、源氏の一行のはなやかさに対してわが身のまずしさをかなしみながら、姫君の将来を神に祈り、熟慮の末、父入道と別れ上京、そして、誰一の生きがいでもあった姫君を三才という幼少で、紫の上の養女にという話が出たときも、自分の身のほどを考えた、愛する者の遠い将来を考えて、自分自身にうちかち、手離すこ

とを決心した。

「忍」の一字は、彼女のためにだけある文字だと言っても過言ではあるまい。その後、同じ源氏の邸内に生活していながら、わが子を八年もの長きにわたって、一目見ることも許されなかった。紫の上に対する屈辱も、愛する姫君、そして自分自身のためと忍び通した。その結果得たものが姫君の入内であり、その後見役であった。やがて、姫君は皇子を出産、中宮に進み、彼女はその母として高い地位を得た。

紫の上が病気の末、不幸な死を向かえ、数年後、源氏がなくなつた後も、彼女は孫である宮たちに囲まれて、平和な一生をおくる。

この中流貴族出身の明石の上が、長年の苦勞の末、最後に得たこの幸福は、紫の上の一生と比較しても、よりすばらしいものとも思える。（中略）

常におのれを高く持って自己を失わず、身のほどをわきまえ、慎重で、思慮深い性格……これが明石の上である。（後略）

（T・I男 原稿用紙五枚）

この生徒は、父入道の願望を担って上流貴族社会で生きていく明石の上が、常に「身のほど」をわきまえ、「忍」の連続のなかで「幸福」を獲得したのだと、彼女の一生を紹介した上で、彼女の性格を「常に……思慮深い性格」と述べている。生徒たちの「明石の上像」はほぼ一致していて、このほかに「受領の娘という身分の低さ故に苦しみの多い明石の上だ。だが、彼女は彼女なりに、理性的に強く生きた女性である」とか、「明石の上はいつも悩んでいる。悩んで感情におし流されそうになりながらも、いつもそれにまっ正面か

ら取り組み、理性的にかたづけられていた女性だ」とか述べているように、彼女は理性的な性格で、苦しみに耐えて生きた女だと共通にとらえている。

ところが、浮舟については、二通りの「浮舟像」が出てきた。一つは、浮舟は主体性のない、意志の弱い女で、流された人生を送った女であると考えられるものであり、いま一つは、逆に、意志の強い、こうと決めたらそれを貫き通す女であると考えられるものである。ほとんどの生徒が前者のとらえ方をしており、後者のそれはわずかに二人だけである。

前者の立場に立った感想文には、次のようなものがある。

△感想2▽（前略）浮舟は上品な容姿であるにもかかわらず、田舎で生活していて、田舎じみた女房達によって世話されていたので、どことなく田舎じみていた。そして周囲の状況に消極的に反応し、自らの思いを越えた周囲の思惑に流されていた。このような浮舟は、自覚の薄い受動的な女性である。そしてこのような性格ゆえに、二人の男性から愛されても、どちらか決めることも出来ず、ただ悩むばかりだった。結局、自殺を決意したが、それも未遂に終わり、出家してしまつた。

薫にひかれながらも、匂宮とも関係を持っていた。自分をせめながらも会うたび事に、匂宮の強引な情熱にひかれていく自分をどうすることもできなかつたのだ。もし浮舟が、もっと強い意志の持ち主なら、最初に匂宮に言い寄られた時、ことわる事ができ、こういうふうな苦しみを味わうこともなかつたろう。（後略）

（N・S女 原稿用紙六枚）

この生徒は、浮舟を、周囲の状況や思惑に流された、自覚の薄い受動的な女性と考え、「出家」も流されて無自覚にしたととらえているようである。このほかに、「中途半端でどっつかずの女」「人に流され、自分の意志を通せない、かよわい女性」・「ただ流されて波の間に浮かぶ舟のような存在」・「存在の乏しい人物」などととらえたものがある。

後者、すなわち、浮舟を意志の強い女だと考える感想文を紹介すると、次のようである。

△感想3▽（前略）浮舟は最後に入水を決意するが、これは相当の決断力が必要だ。意志が弱いものにできる決断ではないように思う。浮舟は薫と匂宮との両方をさまよっていて、片方に決めないので、どっつかずの意志の弱い人間のように見られるが、恋をしている人というのはこんなものではないのだろうか。人は一度に二人の人を好きになるのは誰でも知っているようにたやすいことであり、特に薫と匂宮のような全く別の男性に、一方にはないものどおしを求めて愛情を注ぐことは十分ありえるはずだ。だからこのようにどっつかずになつたのは意志が弱いのではなく、女性として別に当然なので、入水の決意したところやその後、尼になる決意をかため、薫たちの使者がたずねてきたりしても決して会おうとしなかつたところなどを見ると、彼女は反対に意志の強い、こうと決めたらそれを貫ぬきとおす女性なのだ。（後略）（E・M女 原稿用紙四枚）

この生徒は、浮舟の「入水」以後の生き方に眼を向けて、入水するにも、尼になるにも、薫の使いを拒否するにも、意志が強くなければできないことではないと考へて、浮舟は意志の強い女だととらえ

ている。この考えの上に立って、他のほとんどの生徒たちが「浮舟は意志の弱い女だ」というときに根拠としてあげた、薫と匂宮の間で悩む浮舟^{フネ}を、恋をしている人間はこんなもので、どっちつかずの態度は女として当然だと論じ、これを意志が弱いからだとしてらえる立場を否定している。やや論に無理な点もあるが、「入水」以後の浮舟のとらえ方は、他のほとんどの生徒が見落としているだけに評価できる。

この二つの相反する考え方をみると、前者（「意志の弱い女」説）は、「入水」前までの浮舟に重点を置いて、「入水」後を軽く扱っており、後者（「意志の強い女」説）は、その逆の扱い方をしている。

このように「入水」以前に重点を置いた場合と、以後に重点を置いた場合とで、相反する「浮舟像」が出てくるのも、そこに必然性がないわけではない。中野幸一氏は、「浮舟の物語は、構想的におのずから入水以前と以後とに二分されるが、それぞれの部分に課せられた問題も別個である。入水以前の物語は、匂宮の情熱的な愛と薫の篤実な愛との間に立って、懊悩の限りを尽す都馴れない女性の極限の姿の徹底的な追求であり、入水以後は、愛欲の世界に翻弄され傷ついた若き女性がその超脱を志して仏道に救いを求めつつ煩惱と戦ういたましい姿の究明である。この二つの大問題についての追求を一身に引きうけて造形されたのが浮舟という人物像であった」と述べている。前半の「懊悩の限りを尽す」浮舟と、後半の「超脱を志す浮舟」とでは、そこに生きる姿勢の違いがある。それが相反する「浮舟像」を生み出したものであろう。

しかし、真の「浮舟像」は、この前半と後半とを通した形でとらえなければならぬ。浮舟は、はじめ自主性のない、意志の弱い女で周囲の状況に流されていたが、「入水」以後は、次第に自らの意志で生きていく女へと変わっていった。このように人間として成長していく浮舟を総合的にとらえるのが作者の意図にかなっているはずである。

それでは、なぜほとんどの生徒たちが「入水」以前の浮舟に重点を置いて、浮舟は意志の弱い、流される女だととらえたのであろうか。この原因としては、第一に、私の指導のしかたに問題があったことがあげられる。第六章「浮舟の出家」の指導において、「原文に傍注を施した朗読のための資料」を用いて、朗読をくり返しながら解説を適宜入れてだいたいの内容をとらえさせる指導はしたが、浮舟の出家が彼女自身の積極的な意志でなされたのかどうかを深く考えさせないで終わってしまった。この指導で、浮舟が中将（浮舟を助けてくれた妹尼の亡き娘の夫）の執拗な求婚を避けるためもあったが、自らの強い意志で出家したこと、以前の浮舟とは違ってきていることを明確にしておくべきであった。

このように指導上の問題もあったが、第二に、私の「浮舟物語」の教材化のしかたにも問題があった。私は、このたびの浮舟の教材化にあたって、桐壺帝の子八宮を父としながらも母親の身分が低かったこともあって、田舎や、財力を中心に現世的欲望の渦巻く受領世界を転々とせざるをえなかった浮舟を浮き彫りにするために、第一章「生いたち」、第二章「左近の少将の婚約破棄」をとりあげた。これと教材の分量との関係もあって、第一章から第五章まで、

周囲の状況に押し流されながら生きていかざるをえない浮舟の姿がクローズ・アップされる結果となり、自らの意志で生きていこうとする浮舟の姿は第六章でしか読みとることができなくなった。浮舟の全体像を考えると、バランスの崩れた教材化のしかたであった。今から考えると、第一章「生いたち」は、あらずじ、で紹介するにとどめておいて、その代わりに、終章として「夢浮橋」の巻から

浮舟が薫からの使いを拒否する部分、をとりあげて、浮舟が薫のこと、母親のことなどに心を痛めながらも俗世間とかかわりを断ち切って生きていこうとする姿を浮き彫りにすべきであった。こうすれば、生徒たちに、「入水」後、浮舟がしだいに自らの意志で生きていく姿を読みとらせることができたであろう。

②「学習者に、作者繁式部と同じ受領層に属する二人の女性が、その身分ゆえに、それぞれどのように生きていかなばならなかったかを追求させたかった」というねらいについて

二人の人物の生き方を追求していくにあたって、「その身分ゆえに」という読みの観点を設定したのは、次の二つの理由による。まず第一に、読みの観点を設定したのは、漠然と二人の生き方を読んでいくよりも、一つの観点を設定して読んでいく方が、深く読めると考えたからである。第二に、「その身分ゆえに」という観点を設定したのは、次の通りである。明石の上と浮舟はともにもと身分の高い人の血筋をひいていながら、それぞれ事情があった。たんに受領層に落ちぶれたが、後に二人とも再び上流貴族の世界とかかわって生きていくようになる。とすると、当時は身分制度の厳しい社会であったので、彼女らの運命に「身分」というものが深くかか

わってくるはずだと考えた。そこで、「身分」というものが二人の人生にどのような影響を及ぼしているかを読んでいこうと考えたのである。

以下、「その身分ゆえに」という読みの観点を設けたことの是非に焦点を絞って検討していきたい。

明石の上と浮舟はともに「受領層に属する女」としてとりあげたのに、二人に対する生徒の印象・感想には、大きな違いが出てきた。

ある生徒は、次のように述べている。
△感想5▽明石の上と浮舟について学習し終えて、まず感じたことは、同じ受領層の女でありながらも違うものなのかということだった。(中略)明石の上も浮舟もいわゆる落ちぶれ貴族という点で一致する。また二人とも、二人の身分から言うとも身分不相応な高い身分の人から愛され、それぞれに苦悩する。しかし二人のたどった道は、かなり違う。

二人を比較してまず思うことは、明石の上は結局、幸福になったが浮舟はけして幸福になつたとは思えない。浮舟にも明石の上にも劣らない幸福が訪れたかもしれないのだと思う。明石の上はしっかりした女性であつたけれども、源氏との結婚は明石の上の意志には反していた。自分の低い身分を充分すぎる程自覚していて、源氏との結婚は不幸になると考えたからだ。しかし浮舟には、そういう意識は見られず、人の言うままに動かされる。私には主体性のない女性に思える。(後略)

明石の上と浮舟が、ともに受領層の女・落ちぶれ貴族・身分不相

応な結婚といった同じような条件のもとにありながら、二人のたどった道は大きく違つて、結局、明石の上は幸福に、浮舟は幸福にはならなかつたと述べている。そして、その要因を二人の「身分意識」と「性格」の違いに求め、明石の上は「自分の低い身分を充分すぎる程自覚した」「しつかりした女性」であつたのに対して、浮舟は「そういつた（筆者注。||自分の身分が低いという）意識も見られず、人の言うままに動かされる」・「主体性のない女性」であつたこと、この違いが二人の人生を大きく変えたと考えている。

明石の上の場合をとりあげて、さらに彼女と「身分」のつながりを考えてみたい。

明石の上の人生は、△感想1▽でも「忍」の一字は、彼女のためだけにある文字だ、と言つても、決して過言ではあるまい」と述べているように、光源氏と結婚して以来、ずっと自己の「身のほど」をわきまえて耐え忍ぶことの連続であつた。そうして、最後に幸福をつつかんだのである。

△感想6▽（前略）あの頃は、常に出世とか身分を気にしていたと思う。一族の繁栄のために、入道と明石の上達が離れ離れになつたことも、明石の上が姫君を手離さなければならなくなつたことも、それを思うと、少し淋しいような気がする。愛する人のため自分を犠牲にして、悲しさ・辛さ・淋しさをがまんして、その人の出世や幸せを願い続ける入道。そんな入道を以前は一族の繁栄のために明石の上を利用したと考えていたけれど、今は「利用」という言葉を取り消したい。父である入道は一族の繁栄を通して明石の上の幸せを願ひ続けたのだと思う。つまり、現代を生きる私には、ささやか

な幸せさえあればそれでいいと思われるけど、あの頃の人々は、一族の繁栄とか出世が幸せだと思つていたのかもしれない。繁栄とか出世の中に幸福をみいだしたのかもしれない。（中略）常に、華やかな世界の裏を歩んできた明石の上、そして明石一族。それゆえに、私は幸せになつてほしいと思ひながら読んできた。自身が低いため、そのことを痛感し、人の前に立たないように生きてきた明石の上、一族。だからこそ、明石の上は、幸せになれたんだと思ひたい。そして、明石の入道の、意地らしいほどの淋しい人生のためにも、明石の上は幸せだ。たと信じたいような、そんな気持ちだ。

（S・Y 女原稿用紙四枚半）

この生徒は、現代と当時の幸福観の違いを考えた上で、一族の繁栄に価値を置く明石一族にとつて、上昇志向を計れば計るほど「身分」が厳しい形で入道や明石の上へのしかかってくることや、自己を犠牲にするなかでしか明石の上には「幸せ」が獲得できないことをとらえている。

このように、生徒の感想をみてくると、明石の上の生き方を追求する場合に、「その身分ゆえに」という読み観点を設定することは一応妥当であつたと言つてもよからう。

浮舟の場合は、どうであらうか。

△感想5▽の生徒が指摘していたように、浮舟は全く自分が身分の低い女であることを自覚しないで生きている。主体性のない女である。ところが、浮舟が身分意識を持たないといつても、浮舟の人生と「身分」のつながりが無いわけではない。たとえ、浮舟が義父常陸介について母とともに田舎に下らぬばならなくなつたのも、

父八宮が侍女中將の君に生ませた浮舟を認知しなかつたからであるし、浮舟が薫に三条の邸から宇治に連れていかれたのも、薫が浮舟を一人前の女として扱わなかつたからである。したがって、浮舟の人生と「身分」のつながりが薄いわけでは決してない。

しかし、生徒の感想文からすると、浮舟の人生全体に大きな影響を及ぼした要因としては、周囲の状況（環境・境遇）と彼女の性格をあげることが出来る。次の感想文は、「環境・境遇説」である。△感想⑦V「明石の上物語」、「浮舟物語」と、二人の受領階級の女性に接し、振り返ってみると、明石の上に比べて、浮舟の印象はさほど鮮明でない。二人の男性との三角関係に陥つた末、自殺未遂を犯すという、かなりドラマチックな境遇におかれた人物であるのに、浮舟は私にとって何かしら存在感の薄い人物である。浮舟というその名が示すように、薫と匂宮の間で波間に浮かぶ小舟のようになり、どちらの岸にもたどりつけないままに、さまよっていたからだろう。一つには、その育った環境も彼女たちのたどつた人生の上

に大きな影響をおよぼしていたと思う。

どちらも、受領層の娘である点では変わりないが、その環境は大きく違う。肉親の愛情につつまれて育つたのが明石の上なら、満たされないものを感じながら育つたのが、浮舟だと言えるだろう。明石の上には、いつもそばに肉親の支えがあり、遠く離れていても心の通じあえ、そして彼女のことを思いやってくれる親があった。（中略。浮舟が肉親の愛に恵まれぬことを述べて。）私は、この物語を最初に読んだときは、浮舟のことを何て主体性のない、はっきりしない女性なんだろうと思った。そして、浮舟のこんな態度

が、薫にしる匂宮にしる、まわりの人を苦しめているのではないかと、彼女に対して腹立たしささえ感じたのだ。でもこうして、もう一度読み返してみると、何が浮舟をそんな女性にしてしまったのかに目を向けてみなければならぬと思った。そして、このような別な角度から浮舟を見つめ直してみると、彼女こそ同情すべきかわいそうなんなんだということがわかった。

前に述べたように、浮舟には父親の愛情が薄い。それゆえに、頼れる人は母、中將の君だけであつた。しかし常陸介への気がねから、普通の親子のように甘えたくても、我慢しなければならぬというのを自然のうちに理解し、また中將の君も愛情を十分に態度に出してやる事ができなかった。そして、自分と夫の板ばさみになり気苦労の多い母を、それ以上苦しめないためには、自分が何も母の望むようになり、お互いがこの家で暮らしやすいようにするしかないのだ。浮舟の人生は、幼い時からきつとこのように自分の感情をおさえ、精神的にいつも孤独の縁に追いやられているような毎日のくり返してあつたにちがいない。そんな彼女が二人の男性に同時に愛されてしまうという重大な状況に一人投げ出されれば、大海にこぎ出した浮舟のように頼りなく行く先が定まらないものしかたのないことではないだろうか。自分の心を打ち明けて聞いてもらえぬ人が彼女にはいなかった。（後略）

（Y・N女 原稿用紙四枚半）

この感想文は、同じ受領層の娘でありながら、肉親の愛情に恵まれた環境・境遇にあつたかどうかで、明石の上と浮舟とではその生き方に大きな違いが出たことを述べている。ただここで注目したい

ことは、この生徒がはじめは浮舟を「主体性のない、はっきりしない」性格の女だととらえ、これが彼女に他の人物を苦しめる行動をとらせたのだとしていたのに、後に、その性格や行動を生み出した原因として「環境」を考えるに至った点である。この生徒の考えによれば、明石の上の場合と違って、浮舟の場合は、父親が実父ではなく義父であること、実母も今の夫に気がねして浮舟の世話が十分にできないことなど、浮舟の置かれていた環境、境遇が彼女の人生に大きく影響を及ぼしたというのである。

これに対して、「環境・境遇」説を否定はしないが、浮舟の「性格」が彼女の人生には大きく作用していると述べるのが、次の感想文である。

△感想8 V 同じ受領階級に生きながら、明石の上と浮舟は正反対と違っていいほど性格が違い、また、それゆえに一生までもまろつきり違ってしまっただようだ。(中略、二人の境遇の違いと幸・不幸な人生との関係を述べる。)

しかし、私は、このような境遇だけで、明石の上と浮舟との一生に大きな差ができてしまったとは思わない。性格におおているところも多いと思う。明石の上にしっかりと性根、浮舟の自主性のないど、ちつかずの性格、ほんとうに二人の性格はぜんぜん違う。

「もし、この薫や匂宮に求婚されている女性が、浮舟でなくあの明石の上だ。たらどうなっているだろうか」と学習している時、何度か思った。もし、そうであれば、まず、薫と匂宮の両方に愛されるという状態はありえなかったであろう。明石の上ならば、はっきり匂宮を拒否するだろうし、たとえ二人の男性から愛されるという

状態になったとしても、どちらかに決めてしまっただろうし、『死』などは決して考えないですんたろう。

しかしながら、これは浮舟の性格ゆえにおこったことであり、明石の上ならば、まずこのようなことはおこらなかったかもしれない。(後略) (T・T女 原稿用紙四枚)

この生徒は、浮舟と明石の上との一生に大きな差が出たのは「環境」のせいだけではなく、「性格」の違いによる点が大であると述べ、さらには、浮舟の立場に明石の上が立った場合を想定し、結局、浮舟の「性格」が浮舟の生き方を大きく支配したのだと結論づけている。

以上、浮舟の人生に大きな影響を及ぼした要因として、生徒たちは「性格」と「環境・境遇」の二つを考えたが、これは「浮舟」の研究の間でも論争のあるところである。この二つの要因のほかに、生徒たちは浮舟に身分意識がないとして、浮舟の人生と「身分」とのつながりを全く無視しているが、前でも述べたように「身分」も一つの要因として捨てることはできない。このように考えていくと、浮舟の一生を考えていく場合には「性格」・「環境・境遇」・「身分」の三つの観点が必要であると言える。この三つの観点によって、総合的に浮舟をとらえるのではなくて、「浮舟像」を誤ってとらえることがありうる。ところが、私は「性格」・「環境・境遇」を無視して「身分」だけをとりあげて、「指導のねらい」としていた。このねらいは、すでに前に述べたように明石の上には適当であっても、浮舟には不適當であった。ただ、救いは、恥ずかしいことに、「指導のねらい」を「その身分ゆえに」としながらも、実際の

指導では「性格」・「環境・境遇」をもふまえた指導をしていたことである。

では、いったい明石の上と浮舟とに共通する読みの観点としては何が適当であったのか。共通する観点としては、「身分」を「境遇」のなかに含めて、その人物の内的条件である「性格」と、外的条件である「環境・境遇」の二つが適当であったと言える。したがって、「指導のねらい」とした「その身分ゆえに」を「その性格や環境・境遇ゆえに」とすべきであったと思う。

(3)「この二人の人物を通して、人間というものについて考えさせたい」というねらいについて

六十五時間に及ぶ「明石の上物語」・「浮舟物語」の学習を通して、生徒たちは次のような認識の深まりを見せた。

次にあげる感想文は、明石の上と浮舟を比較して、(1)共通性 ↓ (2)異質性 ↓ (3)共通性と、段階を踏むに従って思考が深まっているものである。

△感想9▽この一年間の源氏物語学習の中で学んできた二人の女性、明石の上と浮舟について、感じたことを述べたいと思う。同じ受領階級に生きたが、二人は正反対といっているほど性格が違い、それゆえに、一生までもまるっきり違ってしまつたようだ。(中略)

浮舟の性格の、どちつかずで自主性のないところは嫌いだ。あれでは、人形とたいしてかわりはないと思う。やはり、明石の上のしっかりした性格の方が、好ましい。しかし、このしっかりした性格の明石の上ではあったが、よく考えてみると、やはり知らぬま

に、時代に流されていたようだ。明石の姫君を紫の上の養女にするために、手ばなしたあたりは、このことがよくうかがわれる。

明石の上と浮舟、一生は大きくかけはなれているとはいえず、どちらも、やはり、時代の波を大きくかぶっていたにすぎないかわいそうな女性であったのかもしれない。(T・T女 原稿用紙四枚)

(1)同じ受領階級(共通性) ↓ (2)性格と一生の相違(異質性) ↓ (3)どちらも「時代の波」をかぶって流された、かわいそうな女性(共通性) というように、思考が深められている。このように読んでいくと、明石の上、浮舟はともに、やれ幸福だ、やれ不幸だと言ったところで、どちらも「はかない存在」・「不安定な存在」であるにすぎないということになる。この感想文は、作者が巨視的な立場から人間をとらえていることを鋭く見抜いている。

このように、登場人物に距離を置いてみると、次のような感想文も生まれてくる。

△感想10▽(前略)ところで私が「源氏物語」を勉強している時に、いつも感じる事がある。それは、「人間の哀しさ」というものだ。浮舟は自分を深く愛してくれる薫を裏切れない。自分を情熱的に愛してくれる匂宮に魅かれていく。これは人間として極く普通の感情だろう。

そして薫が故大君を忘れられない気持ちもよくわかる。一度愛した人を、そう簡単に忘れられるはずはないからだ。そんな薫がしだいに本当の浮舟に魅かれていき、彼女を愛するようになる。けれど匂宮に浮舟を奪われた事を知った時、薫はどう思っただろう。後悔をしたのではないだろうか。それよりもやはり、人間の哀しさ、な

んだ。(中略)

そこで私はこう考える。よく『源氏物語』は、あはれの文学といわれるが、私流にこれを現代語訳すると、人間の哀しさ、ではないだろうか。

薫が本気で浮舟を愛し始めた時、浮舟は匂宮を愛し始めていた。死を決意した浮舟が残した手紙は匂宮あてだったが、後々まで浮舟のことを思ったのは薫だった。こんな人間の心が思い通りに行かないのを見ると、やはり私は、人間の哀しさを感じる。そして人間の生き方が大変にむずかしいものだと思えてくる。本当に、人の心って思い通りになりませんね。(Y・H女 原稿用紙三枚半)

これは、人間と人間の心が通じ合わないですれ違っていき、その悲劇に眼を向けて、そこに「人間の哀しさ」を読みとった感想である。作者紫式部の深い人間観察と人生凝視とを感じとった、すぐれた感想文である。

これらの感想文を読むと、私のたてた「指導のねらい」もある程度達成していると言ってもよからう。

(4)「二人の人物を学習させることによって、同じ受領層に属していた作者紫式部の内面世界を探る」というねらいについて

ただ単に登場人物像やその生き方などを追求する読み方だけでなく、作者を意識した読み方をさせたいと考えて、作者紫式部が自分と同じ受領層に属する「明石の上」と「浮舟」をそれぞれどのように描いているか、それぞれの女性にどのような作者の願いや思いが託されているかを読みとらせようとした。

作者の環境や性格が投影されているといわれる明石の上の場合

は、授業の中でその由を紹介して生徒に注意を喚起したが、浮舟の場合は何も触れなかった。登場人物と作者を強引に結びつけるのは問題があるので、そうならないように配慮したからである。

「紫式部と明石の上」という題のレポートに、次のようなのがあ

る。

△レポート1V(前略)まず、ひとつの結論として、紫式部は明石の上を設定しその生涯を描くことによって、彼女自身の夢や憧れを拒絶された空しさを充塞させたのではないだろうかということを、先に述べておく。では、なぜそうなるのかを、次のように、紫式部と明石の上を比較して説明したい。

(A)紫式部は藤原為時の娘である。為時は藤原冬嗣の六男良門の四代孫、母も同じく冬嗣の長男良良の五代孫であるから名門の家柄ではある。しかしその栄えは、冬嗣の幾流かの子孫のうち、良房、基経、やがて兼家、道長の流れへとしばられていったため、良良や良門の流れは没落の運命をたどり、紫式部の父為時の時には、もうはっきりと受領層として品定まる身分におちていた。

(A')明石入道はもととはいえば大臣の子で近衛の中將であったが、落ちぶれてしまった。

(B)十九才の時に父について越前に行った紫式部は、帰京した翌年、藤原宣孝と知り合い、その翌年の春結婚するが、結婚前の贈答歌によると、沈着冷静でしんの強そうな彼女の応待に華美で強引な彼も手こずったらしい。

(B')結婚前、源氏は明石の上の強い拒絶に合い、手こずっている。

(C)宣孝は二年余の結婚生活の後、二人の間にできた賢子という女兒

を残して病没。

(C) 源氏は身重の明石の上を残して上京。

(D) 当時は受領の娘とはいっても、その結婚の相手によっては非常な栄誉を得ることもでき、それは受領の娘たちにとって夢のような憧れであった。もちろん、紫式部のような反省癖のつよい女性が、安易な夢想に心身をゆだねるとは思われないが、現実には自分の夫となったのがやはり良門流の自分とほぼ変わらない中流階級の男であったとき、そこにはひとかけらの夢もしめだされてしまったことをわびしく実感しなかったとはいえないだろう。しかも夫の没後、彼女はあくまで受領の若い後家であり、そうした決定的なわびしい運命を改変することなどできるはずがなかった。

(D)とところが明石の上が結婚した源氏は帝の血をひく上流貴族であり、その運は上昇しつつあった。そして源氏は二人の間にできた娘とともに明石の上を上京させるのである。

以上を見ると、紫式部と明石の上とは似た者同士でありながら、二人の半生は除々に暗と明とに分かれていっている。

その後、紫式部は、道長の娘で一条中宮として時めく彰子に仕えるようになる。しかし、それまでの暗い生活とうってかわって世の最上の世界に住むようになって、彼女は有頂天になり得なかった。上流の生活をまざまざと見透かすことができたために、それまで高貴の世界を胸ふくらませて空想していたことが空しくなってきた。(中略) 明石の上はその気高さがゆえに源氏の心をひき、ついに春宮の外祖母という地位を得る。受領層の娘の栄華達成ということ、明石の上は作者の理想とみられる。(後略)

(M・I女 原稿用紙六枚半)

このレポートは、時間の経過に従って、紫式部の境遇と明石の上のそれとがどのように変わっていくかに着眼して、紫式部の境遇が悪化するのと反比例して、明石の上が栄華を獲得していくように描かれていると指摘している。そして、このような描き方を作者がしたのは、「作者自身の夢や憧れを拒絶された空しさを充塞させたのではないだろうか」と推論している。

「紫式部と浮舟」の場合は、作者の投影説は考えられない。作者が浮舟という人物の生き方を通して、どのような思いを描こうとしているかを考えることが、作者の意識を読むことになる。

△感想11V(前略) つまるところ、紫式部は浮舟という女性を用いている時は、理性ではなく、感情に流されてしまうという箇所を言いたかったのであろう。加えて、紫式部と同じ中流貴族社会に住む浮舟の生涯を通して、彼女自身が宮仕えをしていた上流貴族たちの表面の華やかさではなく、裏に秘められた、その上流貴族階級の落とし子^{おとしこ}たちの悲惨さを表現しようとしたのではないだろうか。又、紫式部自身も、上流貴族社会に対する、強い憧れを抱きながら、やはり、そこに安住できない何かを持っていたのであろう。

以上により、紫式部という人は、この「浮舟物語」のみならず「源氏物語」という長編の物語に、彼女の生きざまを託したのだ。なぜなら、彼女は、この物語を通じて、彼女の持つ不安・苦悩・孤独感を随所に表しているからだ。しかし、この「浮舟物語」だけで、作者のことを読みとるということはほとんど不可能に近いけれど

も、彼女は、「源氏物語」の女性達一人一人に、自分自身を投影したのではないだろうか。

(N・S女 原稿用紙4枚)

この生徒は、紫式部が自分と同じ中流貴族に属する浮舟の生涯を描くことを通して、上流貴族の華やかさの裏に秘められた、上流貴族階級の、落とし子、たちの悲惨さを表現したのではないか、また、作者自身も上流貴族社会に対する強い憧れを抱きながら、一方ではそこに安住できない何かがあったのではないかと述べている。

そして、さらに、この源氏物語には、作者の抱いている不安・苦惱・孤独感が潜んでいることを指摘している。

「二人の人物を学習させることによって、同じ受領層に属していた作者紫式部の内面世界を探る」というねらいは、高校生にとつてやや高度な学習かと考えていたが、引用した感想文・レポートにみられるように、ある程度ねらいは達成したとみてもよいのではあるまいか。

四

私の教材化した「明石の上物語」・「浮舟物語」によつても、生徒たちは、かなり多様な読みとり方をしてくれた。今後も、反省点を生かして「源氏物語」の教材化を試み、高校生を源氏の世界に案内したい。

そのためには、自明のことではあるが、作品研究、作者研究および学習者研究をさらに進めていきたい。

(注) 1「古典Ⅱの学習指導—教科書の比較研究と教材化の試み—」

(広島県立安古市高等学校『研究紀要』第二号・昭和52・

3) 所収の拙稿「教材化の実態『源氏物語』の場合」

2『月刊国語教育研究』(日本国語教育学会) 第八十一集特

集「教材化と教材研究」

3 指導過程は、「国語科における学習指導の内容と方法」(広

島県立安古市高等学校『研究紀要』第四号・昭和54・3)

所収の拙稿「『源氏物語』の学習指導—明石の上物語と浮

舟物語をとりあげて—」に詳しく報告している。

4「解釈と鑑賞」昭44・6 所収の「源氏物語の作中人物像(二)

—宇治十帖を中心に—」

5 島津久基『源氏物語新考』(昭11)

(本学附属中・高等学校教諭)